

音響の変化がもたらす心理的映像表現の研究

大阪芸術大学短期大学部 メディア・芸術学科 教授 三原 光尋

当研究に取り組むきっかけとなったのは、スタンリー・キューブリック監督「シャイニング」の鮮烈な記憶からです。映画オープニング、一台の車がコロラド州の山沿いの道をひた走る。単に車が走るだけの映像ですが、そこに監督は“とてつもなく不安を抱かせる”音響設計を施し、故に車が走る映像は、これから起こるであろう恐怖物語へ観客を誘うことに成功しました。

その後、映画を学ぶに於いて音響設計を考えると、常にその映像が頭を過り、「もし、あの音響設計でなく、楽しく明るい音響設計なら、あの映像は、まるでピクニックにでも行くかのような解釈になるだろうか...?」当時、その映像に勝手に音を入れ替えたりして、その探求をしておりました。その記憶が今回の研究課題へと。

具体的な研究プランとして、まず短編サイレント映画二作品「山」「海」を制作し、双方の作品に、異なる3パターンの特徴的な音響設計を構築しては映像に重ね、それが鑑賞時にどのような心理的印象“映像世界”を感じるかをモニターリングする計画を立てました。

「山」「海」の二作品の内容は、名の通り山と海をロケーション舞台とし、双方に一人の登場人物を配置し、その人物がその場所で演じる5分程度のサイレント映画を作ります。山や海を撮影場所に選んだのは、映る情報量の少ないシンプルな場所であるが故に、後ほど重ねる音響によって、より克明に研究テーマが浮き彫りになるのでは?との考察から。例えば都会の雑踏等は、それ自身に映像の情報説得力が強く、研究テーマがぼやけると考えました。

脚本化に際して、当学院卒業生の脚本家渡嘉敷海音が参加し推敲を重ね、8月末に脱稿に至りました。

撮影も当学院卒業生の水本洋平カメラマンが担当し、撮影機材はiphone 13 miniに。小型である分、手持ちなどフレキシブルな撮影が可能で、学生諸君らが普段から使いこなせる利便性を考慮しました。その反面、画面の安定性に欠け、不必要に撮り手を感じさせる危険もあり、手ぶれ補正機能を駆使し回避するよう努めました。

撮影は「山」からスタート。9月5日～7日まで水本氏と俳優高橋友里恵と私との三名で奥多摩の溪谷へ。脚本内容は夏の緑に包まれた深い溪谷を、一人の女性が延々と歩きます。歩く彼女にナレーションやテロップ等の説明は入りません。ひたすら歩きます。我々はその歩く俳優の仕草や表情を撮り進めました。

続いて「海」、水本氏と演じる俳優は太田美恵に替わり、私との三名で10月29日～30日と三崎半島先端の海に

向かいました。こちらも「山」と同様に一人の女性が岩場や波打ち際を、延々と歩きます。勿論、その行動に状況説明は入れません。

両作品の撮影に於いて注意を払ったのは、人工的な物が映り込まないように。情報量の少ないシンプルな大自然の中に人物を配置することを心がけました。幸い両日とも天候にも恵まれ、我々の狙った映像を得ることが出来ました。

11月に入り編集作業を。これも当学院卒業生の浅田菜祐花が動画編集ソフトのプレミアで執り行い、グレーディング(色調調整)などは引き続き水本氏が担当し、まずはベースとなる5分のサイレント映画二作品を完成させました。その二作品に、先に申した3パターンの異なる音響設計を施しました。全ての音源はフリー音源からの選択です。①「サイレント」シンプルに映像だけ。②「恐怖」不安を増殖する音響設計。③「ヒーリング」心癒される音響設計。④「ポップ」明るい明快な音響設計。

出来上がった計八作品を、DVD ディスクに移して、令和六年一月から、研究内容を知らない幾人かに大型テレビモニターで鑑賞して貰いました。

鑑賞者の選定に関しては、あえて映像の専門的な人材を外しての知人に声掛けしました。

各作品、サイレント作品に始まり、続けて鑑賞。鑑賞後のディスカッションでは、共通する意見が出ました。「重なる音響が違うだけで、全く作品のテイストが変わる。特に出演者のイメージが違って感じた」

②の不安を増殖する音響設計は、「登場人物がこれから自殺するのは...」「悪霊にでも憑りつかれている?」③のヒーリングな音響設計では「一人のんびりと散歩しているかのよう」「心落ち着く」④のポップは「人物に何か楽しいことがあったの?」「そこへ行きたくなくなった!」等と全く同じ映像でも、音響設計を変えるだけで受け取る意識が違ってくることを参加者含めて私自身も実感することとなり、改めて音響設計の変化による心理的な効果の“面白さ”を知り、その重要性を痛感した次第です。

この研究経験は、これからの私の創作を、より創造性を高める知識の財産となり、次回作品に邁進したいと思えます。更に今後、当学院で映像を学ぶ学生諸君らに、作品創作の一環で示せる実践的な良い教材となり、大いに活用させて頂きます。

当研究に、ご支援頂き有り難うございました。